朝鮮歴代の国号とその由来

朝鮮・平壌

チュチェ98（2009）

朝鮮歴代の国号とその由来

朝鮮・平壌

外国文出版社

チュチェ 98（2009）年

目　　次

はじめに

一般的に、国号は自然を征服し、社会の進歩を推し進めてきた人民の歴史と深いかかわりを持ち、そこには国の始原と人民の願望、信仰などが反映されている。

ある国号は短命で歴史にわずかに名をとどめ、ある国号は長い時代を生き抜いた。

朝鮮の歴史は 5000 有余年を数えるが、その間、さまざまの国が興っては消え去った。

朝鮮民族史上最初の国家であった古朝鮮をはじめ扶余（プヨ）、句麗（クリョ）、辰（チン）などの奴隷制国家、そしてその後に続く高句麗（コグリョ）、百済（ペクチェ）、新羅（シンラ）、伽倻（カヤ）、渤海（パルヘ）、高麗（コリョ）、李（リ）氏朝鮮などの封建制国家がそれである。

本書には短命に過ぎなかった群小国家を除き、朝鮮史に大きな足跡を残した国々の名と由来、その歴史的な意味が概述されている。

編集部

1　古代諸国の国号

(1) 最初の国の名－「朝鮮」

朝鮮（古朝鮮）は、紀元前 30 世紀初め、檀君（ダングン）によって建てられた朝鮮民族史上最初の国家であった。

長年、神話中の人物とされていた檀君は、檀君陵の発掘調査によって、平壌（ピョンヤン）に生をうけ、朝鮮国を建てた実在の人物であったことが判明し、さらには、朝鮮民族の最初の古代国家の成立と歴史も正しく解明された。こうして、朝鮮人が 5000 年もの長い間誇り高く呼称してきた「朝鮮」は、世界でもっとも古い始原と由来を持つ国号の一つであることが確証されたのである。

檀君の建国を伝える内外の文献はいずれも、その国号を朝鮮であると記録している。

現存する文献のうち、檀君神話をはじめて伝えた『三国遺事』は、檀君による建国と国号制定の経緯を次のように述べている。

「『古記』によると、昔、桓因（ファンイン）の子桓雄（ファンウン）がしきりに天下を望み、人

間世界にあこがれていた。

わが子の意中を知った桓因は、下界の三危太伯（サムイテベク）を見おろし、その地が人間に大きな利をもたらすであろうと思われたので、天符の印 3 個を授け、その地を治めるようにした。桓雄は 3000 人を引き連れ、太伯山（妙香（ミョヒャン）山）の頂の神檀樹の下に降りて、ここを神市（シンシ）と名付け、自らを桓雄天王と称した。彼は風伯、雨師、雲師に穀物、生命、疾病、刑罰、善悪などをつかさどらせて、人間社会の 360 余事を主管し、世を治め教化した。

たまたま 1 匹のクマと 1 匹のトラが同じ穴に住んでいたが、自分たちを人間に変えて欲しいと桓雄にしきりに頼んだ。桓雄は霊妙なヨモギの束とニンニク 20 株を与え、『お前たちが、これを食べて 100 日間日の光を見なければ、人間の姿になれるであろう』と言った。クマとトラは、それを食べて穴にこもった。クマは 21 日目に願いをかなえて女の姿になった。しかし、トラは戒を破ったため人間になれなかった。熊女は結婚の相手がなかったので神檀樹の下で子をはらませて欲しいと祈った。桓雄はしばらく人間の姿になって彼女と結婚し、男の子を産ませた。その名は檀君王倹（ワンゴム）と言う。･･･檀君は平壌城に都を定めて国を建て、朝鮮

と号した」

　これに先立って書かれた中国の『魏書』にも、檀君によって建てられた国の名を「朝鮮」と記している。『三国遺事』に引用された『魏書』には「2000 年前檀君王倹がいて、都を阿斯達（アサダル）に定めて国を建て、朝鮮と号した」と書かれている。

　朝鮮の名が外国に知られて記録に残された最初の文献は、紀元前 7 世紀に出された『管子』である。そこには、当時中国と交易した国として朝鮮の名が見られる。

　朝鮮の歴史学界は「朝鮮」という国号が、古朝鮮の国都阿斯達･平壌および建国始祖檀君の名と密接な関係を持ち、その意味は太陽がさし昇る国だと解明した。

　平壌の「平」は平野、「壌」は川を意味する語であり、したがって平壌とは本来、平野を流れる川という意味であった。それがいつしか、川の流れる地域という意味に変わり、さらに時代が下って、国の首都名として定着したのである。

　阿斯達の「ダル」は山の古語であり、「アサ」は「アチム（朝）」「ア

シ（最初）」「セ（明ける）」などとも通ずる。

例えば、「ナルイ（日が）セダ（明ける）」と言う語の「セ」は「アサ」と通じる語である。この「明ける」「朝」という意味の「アサ」「セ」はまた、太陽、東という意味をも持ち、その語源は「プルク（赤い）」「パルク（明るい）」にある。夜が明けるには日が昇らなければならず、その日が赤く明るいことから、日光を「ヘパル（ヘ＝太陽、パル＝赤い、明るい）」とも言い、「ナルイセダ（夜が明ける）」を「トンイ（東が）トゥンダ（明ける）」とも言っていることからもわかるように、「セ（明るい）」は太陽または東ともつながるのである。東風を「セパラム」、東側を「セチョク」と言うのはその例である。

このように、阿斯達の「アサ」は「プル（赤い）」「パル（明るい）」の古語に源を置いている。これは「新しい」「明るい」ひいては「明るく輝く朝」「光明をもたらす東」という意味である。

阿斯達は、檀君朝鮮建国の地平壌の江東（カンドン）にあり、江東の檀君陵の東北側には、阿斯達とかかわる阿達山（アダルサン）がある。

さて「朝鮮」の「朝」は「アチム（朝）」つまり「アサ（朝）」であ

り、「鮮」は「プル（赤い）」「パル（明るい）」「パク（明るい）」「ピッ（光）」である。したがって「朝鮮」という語は、古朝鮮の首都名である「阿斯達」ないし「平壌」という意味を兼ね備えており、その意味は「明るく輝く朝」「光明をもたらす東方」である。他方、この国名には朝鮮民族の始祖であり、古代国家の創建者である檀君の名がこもっている。

歴史的に国号は、新王朝が立ったり、政権が交替したりした場合に新しく制定されるのが通例であり、そこには新権力の政治理念が何らかの形で反映されるものである。この政治理念を代表するのは、国家の創建者である。

檀君は朝鮮の建国始祖である。そのため朝鮮の諸史書はいずれも檀君を高く評価しており、王朝の交替はあっても、檀君を民族の始祖として崇めることには変わりがなかった。

さて、檀君の系譜を桓因、桓雄、檀君とし、檀君を「天神」桓因の孫であるとするのは檀君説話を伝えた歴代の史書が一致して強調しているところである。『応製詩註』に引用された『古記』によれば、檀君と

契りを結んだ非西岬河伯（ピソカプハベク）の娘が生んだ子の名を夫婁（プル）と言う。ここで「プル」は「火（プル）」つまり天の太陽に通ずる名である。このように天神の血を引くという檀君の生まれは、その名にも現わされている。檀君の「檀（タン）」はもとは「パクタル（明るい）」という意味であり、それは檀君の出身族名であり、出生地名でもあった。古朝鮮の建国集団は、最高神の天（太陽）神を祖宗の神として崇め、「明るい」「光明」という意味の「パク」を種族名に取り入れ、「パクタル族」と称したのであった。このパクタル族の酋長であった檀君は、やがて国を立てて国王となり、「パクタル（ペダル）王」と呼ばれるようになった。こうして見ると、檀君という名には「太陽の後裔」「天がつかわした王」という意味がこもっている。

以上のことから、明るい朝という国号「朝鮮」と、その統治者檀君（パクタル王）は深いかかわりを持っていることがわかる。

上述のように「朝鮮」は、建国の地名阿斯達・平壌と、檀君という君主名、パクタルという族名と深くつながり、それらの名はいずれも、朝鮮民族の母体である檀君朝鮮の住民の独自の信仰と観念にもとづいて

生まれている。

国号「朝鮮」の別称

　檀君が建てた国の名は朝鮮であった。ところがその後に建てられた国家のなかにも檀君朝鮮の血統ないし政治的継承関係を強調して「朝鮮」を号する国がたびたび出現した。そこで後世では、それらの国を血統ないし時代の違いを強調して「古朝鮮」「王倹朝鮮」「前朝鮮」「後朝鮮」「満朝鮮」「李氏朝鮮」などの名で呼ぶようになった。

古朝鮮

　古朝鮮という名称は最初、檀君王朝時代の「朝鮮」を、これを覆して立てた満王朝の「朝鮮」と区別するために、前王朝の最後の王である準（チュン）王の亡命後、彼ら及び後世の檀君朝鮮の信奉者たちによって使用されたもので、それは後期新羅の史家たちにもうけ継がれた。

　1392 年、高麗王朝を滅ぼし、新王朝を立てた李成桂（リソンゲ）一派は権威の宣揚をはかって朝鮮民族史上最初の国の名を踏襲し、国名を「朝鮮」と号

した。そして千数百年前まで存在した壇君朝鮮から満朝鮮までの各朝鮮と区別するために、それらをひっくるめて「古朝鮮」と呼んだ。したがってこの場合の「古朝鮮」は以前に使われた「古朝鮮」と同じ意味ではない。もっとも、李朝初期には「古朝鮮」という呼称は使われず、「前朝鮮」「後朝鮮」「満朝鮮」として表現されたのであるが、いつしかそれらをひっくるめて「古朝鮮」と呼ぶようになったのである。この古朝鮮についてより広く語られるようになったのは、三国時代以前の歴史についての内外学界の関心が高まり、研究が深まってきた最近世のことである。

後朝鮮

後朝鮮は、前朝鮮朝廷内における勢力関係の変化によって立った新王朝で、前朝鮮をほとんどそのままうけ継いだ国である。

壇君朝鮮（王倹朝鮮・前朝鮮）の政治、経済、軍事、文化を継承し、発展させた後朝鮮は、前 4 世紀末に至っては、燕の侵略企図を外交手段によって阻止するほど強大な国力を有していた。

それが前 3 世紀初め、燕の将秦開に攻められて一時遼河の西域満藩汗までの地を失いはしたが、やがて勢いを盛り返して大凌河下流の境界線を確保した。

前 221 年、秦の始皇帝による中国の統一後も、後朝鮮は秦と対抗し、独立を守り続けた。

前 3 世紀末、秦が滅び漢が立った頃、西北辺の情勢が騒がしくなると、後朝鮮の準王は満に命じて辺境の防備を固めさせた。しかし、そこで自己の軍事的・政治的地盤を固めた満は、前 2 世紀初め、漢軍の侵攻から国都と王室を守るとの口実を設けて都に麾下の軍勢を引き入れ、不意に準王を攻撃した。準王とその臣下は南に逃れ、後朝鮮は満朝鮮に取って替わられた。

満朝鮮

前 3 世紀初め、燕の支配下に置かれた遼西地方に残留していた古朝鮮人の後裔の一人であった満は、前 3 世紀末、古朝鮮に帰り、辺境防備の任に当たった。ここで勢力を拡大した侯王の満は、後朝鮮王朝の転覆

を企て、着々とその準備をおし進めた。まず、侯国の経済の発展をはかって農業と手工業を奨励し、漢、匈奴など隣国との交易に力を入れた。また、中国本土からの古朝鮮系難民を受け入れて青壮年を徴するなど兵力の強化に努めた。

満が侯王に封ぜられた十数年後の前 195 年、漢では燕王盧綰の反乱事件が発生した。周勃の指揮する漢の征討軍によって燕はたちまち戦場と化し、多数の難民が古朝鮮に逃れた。

機会をうかがっていた満は、前 194 年、使者を送って準王に「漢軍が十方から進行して来ていますゆえ、臣が宮廷の守護に当たります」と偽り、大軍を引き連れて王倹城（平壌）に向かった。満の謀反に気付かなかった準王は不意をつかれてほとんど抵抗もできずに一族郎党を引き連れて大同江を下り、海路で馬韓（マハン）に逃れた。こうして古朝鮮の第 2 の王朝・後朝鮮は終末を告げ、新王朝が立った。満は都をそのまま王倹城に定め、前王朝の支配機構と制度をほぼ維持し、国号も「朝鮮」を引き継いだ。史上、この王朝は「満朝鮮」と呼ばれている。

新王朝は、王権の強化と支配体制の整備、軍事力と経済力の強化な

どの措置を講じて人民の搾取と抑圧を一段と強めた。しかし、奴隷と奴隷所有者間の階級的矛盾は激しくなるばかりで、奴隷制の危機は深まる一方であった。

社会内部の混乱と深まる危機により、満朝鮮は漢の侵攻を撃退することができず、前 108 年についに滅亡した。このように古朝鮮は、およそ 3000 年の歴史を終えたのであった。

(2) 扶　余

扶余の領地であった北流松花江流域の吉林—長春地帯は、檀君朝鮮の全盛期である前 3000 年紀半ば、古朝鮮の政治的・経済的・軍事的圧力によってその侯国となった。このことは、吉林—長春地帯の遺跡遺物が、檀君朝鮮の文化と深くつながっているということから知られる。

檀君朝鮮の衰退期に強力な勢力に成長した扶余は、その支配を脱して独立した。

扶余の国名は、かなり古くから史書に現れている。たとえば、中国戦国時代(前 5～前 3 世紀)の地理書『山海経』には「不與国」と表記して

伝えられている。

扶余人はもともと古朝鮮人と同じ血を引く朝鮮旧時代類型人に属し、檀君朝鮮の領内で数百年を過ごして朝鮮民族の構成員となった。それで彼らは、古朝鮮のパクタル族に統合された後、自分らもパクタル族と同じ血筋を引くとして「プル族」と称した。『帝王韻紀』はこうした史実を踏まえて、「朝鮮、尸羅（シラ）、高礼（コレ）、南北沃沮（オクチョ）、東北扶余、濊（イェ）と貊（メク）はすべて檀君の後裔である」と記している。

このように扶余人も、檀君朝鮮のパクタル族と始原を同じくし、檀君朝鮮の住民と同様、太陽（天）、火を崇拝した。

扶余の建国説話を通して知ることができるように、扶余人は天とその光（光明、明るい）、および天（太陽）と人間とを仲介する鳥（鳥の卵）を崇拝した。

扶余人が天（太陽）を崇めたことは、建国始祖や王の名を太陽や天と結び付けて呼んだことからもわかる。

扶余の建国始祖とされる東明（トンミョン）または解夫婁（ヘブル）という名はともに天、太陽を意味する名であり、解夫婁の「ブル」は扶余と音義の同じ語である。

「東明」とは「天が下した人間」あるいは「天の子」のことで、扶余人の天神崇拝とかかわった語である。「解夫婁」も太陽を示す「ヘ（日）」と光、明るい、光明などの意味を持つ「プル」とが結びついた語で、これまた太陽（天）とかかわっている。

このように建国者の名または称号が、太陽（天）と結びついているのは、彼らの始祖を天神と結び付けて崇拝し、扶余の建国に際しては、自分たちの崇拝の対象をそのまま建国者の名とし、国名も族名をそのままうけ継いだからである。

扶余人の太陽（天）崇拝は、祭天行事「迎鼓（ヨンゴ）」を通しても知ることができる。「迎鼓」とは太陽（鼓）を迎える、つまり天の意を迎えて国事を定めるということで、扶余人の天神崇拝が生んだ国家儀式である。

以上のように、太陽（天）または火の意味を持つ「扶余」という国号は、太陽と火を絶対的に崇拝していた扶余人が、その崇拝信仰と同時に、檀君朝鮮族の後裔であることを示すために自ら名付けたものだということが分かる。

(3)　句　麗

句麗の国号は、これを継いだ高句麗および民族最初の統一国家高麗の国号にも継承された。

したがって国号「句麗」の意味と由来には、これと血縁的な継承関係にある高句麗、高麗のそれとも通ずる。

句麗とは朝鮮の古語で「偉大」または「神々しい」という意味である。

国号「句麗」の詳細な説明は、高句麗の項に譲り、ここでは句麗国の成立について述べる。

句麗は朝鮮古代国家の一つで、高句麗建国以前の渾江と鴨緑江（アムロク）中流一帯を中心とする地域を占めていた。

国家として登場する前の句麗は、檀君朝鮮領内の一勢力であった。

句麗は山地が多く、平野の少ない不利な地理的条件によって生産力が他に比べて立ち後れていたが、檀君朝鮮の影響のもとに経済、文化が次第に発達し、前 3000 年紀半ばには古朝鮮の侯国となった。このことは句麗の故地で発掘された遺跡遺物が古朝鮮のそれと基本的に一致し

ていることから説明される。句麗の石棺墓からは、琵琶形短剣や琵琶形槍穂が出土しており、また各地に見られる支石墓の造りは、檀君朝鮮後期のそれと同じである。

檀君朝鮮の侯国句麗は、先進文化の影響で前 2000 年紀半ばには農業と牧畜、各種の手工業がかなりの発達を遂げた。前 9～前 5 世紀のものと推定される吉林省集安県五道嶺溝門の積石塚からは、細形青銅短剣、細形青銅槍穂などの青銅武器とともに、青銅の斧類と細文鏡など各種の青銅器、それに斧刃形の鉄製鏃が出土している。

このように前 1000 年紀初め、各種の青銅器とともに鉄器が現れたことから推して、それに先立つ前 2000 年紀に青銅器文化はかなりの水準にあったことがわかる。

生産の増大によって富を蓄積した句麗侯国の支配層は、その軍事力に依拠して権力を強化し、弱体化した前朝鮮（檀君朝鮮）の王権に対抗しうるほどの勢力に成長した。彼らは後朝鮮の出現を前後してついに独立を達成し、句麗国をうち立てた。

句麗は独立後、支配体制を固め、軍事力を強化し、領土を保全する

など国権の確立に努めた。こうして前 11 世紀頃になると、対外的にもその名を広く知られるようになった。

その後、句麗には封建的関係が芽生えはじめ、奴隷主の間では、より多くの奴隷と富の獲得をめぐって激しい競争がくりひろげられた。

前 3 世紀始め、扶余から移住した高朱蒙（コジュモン）の集団は前 277 年、椽那（ヨンナ）部王権に代わり、封建国家高句麗を建てた。こうして奴隷制国家句麗は滅亡した。

(4)　辰

前 3000 年紀半ば、檀君朝鮮の版図内にあった朝鮮中南部地域は、古朝鮮の影響のもとに漸次、古代社会へと移行していった。

当時、朝鮮中南部地域には、大小さまざまな小国が形成され、それぞれ支配機構と常備軍を持っていたが、それらに大きな影響を与えていたのは、檀君朝鮮王朝の奴隷主たちであった。彼らは、西北朝鮮一帯の住民集団とともに南下して、土着民の中に入り込み、東北朝鮮地域から移住して来た住民とも結びついて中南部地域の住民に経済的・文化的影

響を強く及ぼした。階級社会のもとで暮らしてきたこれら檀君朝鮮の住民は、新しい土地においてもかつての生活秩序を維持した。

檀君朝鮮の君主は、朝鮮中南部の諸小国を侯国にして、穏やかに支配する間接的統治形式をとっていた。

しかし、社会の発展にともない経済的地盤を強化していった諸侯国は、古朝鮮王朝の支配から脱しようとする動きを見せ、やがては半独立国的な地位を占めるようになった。それらの勢力は、前朝鮮の後朝鮮への移行後いよいよ力を増大し、前 12 世紀頃に至ると、ついに一つに統合し、古代国家、辰をうち立てた。

この国の国号の「チン」は、固有朝鮮語の「サ」「セ」「シン」が変化した音で、東を意味している。例えば、朝鮮語で東風を「セパラム（パラム＝風）」と言っている。

『三国遺事』には、渤海は「震旦（チンダン）（東方の朝）」と呼ばれていたと記されており、外国では渤海を「海東の盛国」と言った。『魏略』には辰が古朝鮮の東側にあると記されている。古朝鮮の南側にあった辰の位置を『魏略』が東としたのは、辰の人たちが自分たちの国を「東の国」

と称していたことに起因している。即ち辰国人の信仰と観念を反映した「東」という意味の「辰」を国名としたことによって、その地理上の位置とはかかわりなく、古朝鮮人も辰を「東の国」として意識するようになったのである。辰はもとは古朝鮮の侯国であり、住民も同じ朝鮮族であったために彼らもまた古朝鮮、扶余、句麗の住民と同様、「太陽」と「太陽が昇る東」を神聖視し、崇めたのである。

以上のように、「辰」の国号には当時の住民の信仰と観念が反映されているのである。

2　中世諸国の国号

(1) 三国時代

千年の強大国－高句麗

高句麗の建国説話では、建国の始祖王高朱蒙の生い立ちと、建国および国号制定のいきさつが語られている。

「（高朱蒙が）卒本(チョルボン)川に達すると、その地は肥沃で地形が険しいので都を定めることにした。しかしすぐには宮殿を建てることができなかったために、沸流(ピリュ)水のほとりに仮小屋を建てて過ごした。（彼は）国号を高句麗とし、『高』を自己の姓とした」（『三国史記』巻 13 高句麗本紀東明聖王）

このような内容は『世宗(セジョン)実録』巻 154 平安道平壌府霊異(リョンイ)条の説話にも記されている。

この説話を通して、東明王が建てた国の名は高句麗であり、その最初の文字「高」は東明王の姓と同じであるということが分かる。このように、「高句麗」は一つの単語ではなく、「高」と「句麗」の合成語で

ある。

『三国遺事』高句麗条における著者一然(イルヨン)の注釈によると、高句麗の創建者高朱蒙（東明王）の「もとの姓は解氏であったが、自分は日光を浴びて生まれた天帝の子であるとして、高を姓とした」とある。高句麗の統治者の「高」と「解」が通じていることは、『三国遺事』王暦で、東明王の姓は高氏だとしながらも、その子瑠璃(リュリ)から第4代閔中(ミンジュン)王に至る王の姓を解と記していることからも分かる。

「へ」と「コ」はもと太陽を意味する古語「カ」が転訛したものである。

高句麗建国説話はもちろん、高朱蒙の生い立ちを神聖視するための作り事ではあるが、彼を「天帝の子」「太陽の子」とあがめる始祖崇拝の説話を持つことによって、支配階級は人民をより容易に支配することができたのである。

実際、人民も天帝の子を始祖王にいただき、その保護下にある高句麗国は他にすぐれ、いつまでも強国として栄えるであろうと信じて、祖国に忠誠を尽くしたのである。

　このように高句麗の「高」は、建国者東明王の姓であり、同時に太陽を意味する語でもあるところから、国名の意味は、「太陽の子を始祖にいただく高氏の句麗」つまり、「太陽の国（太陽を祖とする国）」である。

　つぎに「句麗」という語には、神々しい、神聖という意味がある。

　現代朝鮮語で「偉大」「神聖」「大きい」の意味を持つ「コルクハダ」は、中世には「コルギ」「コルクイ」と表現されており、これは古語の「コル」から来たもので、高句麗時代には「神秘」「大きい」「神聖」などの意味を持っていた。

　『三国史記』『三国遺事』『高麗史』広開土（クァンゲト）王陵の碑文、牟頭婁（モドゥル）墓誌銘、『隋書』などは、高句麗統治者の称号を「大王（太王）」「聖王」「名王」「神王」「虎（ホ）王」「虎太（ホテ）聖王」「聖帝」と記しており、殊に初期の王には「東明聖王」「瑠璃明王」「大武（テム）神王」など、「神聖」「明るい」「神的」という意味の称号を付けている。

　高句麗の牟頭婁墓誌銘に、高句麗は「天下四方にもっとも神聖な国として知られている」と堂々と宣言していることや、高麗の詩人李奎報（リギュボ）

が高句麗を「聖人の国」としたのは「高句麗」という国号に神々しくも神秘な国だという意味がこもっているからである。それで当時、外国でも、高句麗とその継承国渤海を「高句麗＝句麗」と呼んだのである。

　ところで、「高句麗」という国号は、先にも指摘したように古代国家の句麗の国号を踏襲したものである。

　扶余を逃れて句麗に移った朱蒙は、武力で既存勢力を駆逐したのではなく、句麗王室の婿となって、その王統を継ぐ形で新王朝を建てたのであり、ただ従前の句麗王朝との区別を明らかにするため、太陽を象徴する自分の姓を冠して国号を高氏の国「高句麗」としたのである。

　朝鮮史には高句麗以外にも、新王朝が立つと、歴史的継承性とその正統性を強調する意味で、新たな国号を制定することなく、前王朝の国号を継いだ例がしばしばあった。檀君朝鮮（前朝鮮）の後を継いだ後朝鮮、満朝鮮、李氏朝鮮がそれであり、高麗もまた同様である。

　檀君朝鮮の流れを汲む句麗の国号をうけ継いだ高句麗は、古朝鮮の滅亡後、その故地を回復することによって古朝鮮の継承国となった。

　『三国遺事』王暦では、高朱蒙を「檀君の子」と記している。これ

は、高句麗が古朝鮮の継承国であったことを語るものであり、実際、中国など周辺諸国では、高句麗を朝鮮と呼んでいた。

高句麗が「東方の国」という意味で朝鮮と呼ばれていたことは、高句麗が古朝鮮の継承国であることを物語っており、同時にそのことによって高句麗という国号の意味はいっそう際立っている。

このように「高句麗」は、1000 年近くの歴史を有する強大国の国号であったからこそ、高句麗以後に立った国々のなかには、この国号を継承し、その再興をはかった例が多々あった。高句麗の滅亡後いくばくもない670年初めに立った「高句麗国」、680年代、義州（イジュ）を中心にして立った「高麗国」、大祚栄（テジョヨン）が建国した渤海国に属する「高句麗後国」がそれらである。この国号はまた、朝鮮最初の統一国家、高麗によってうけ継がれ、その名は世界に広く知られた。

漢山負児岳と百済

前 3 世紀半ば、高句麗出身の勢力によって建てられた百済の名は、史書によってさまざまに表記され、百済の存在期間にいろいろと変化し

た。

百済という国名の「百（ペク）」は「白山（太伯山）」の「ペク」や「白岳」の「ペク」のように「白い」のほかに「明るい」という意味を持っている。

百済の「済（チェ）」が以前「テ」「タ」「タラ」と発音されていたことは、古代の日本で百済を「クダラ」と発音していたことからも確かめられる。ここで、「済」は山という意味の「チェ」または「タラ」を意味し、「ク」は太陽または火を意味する古語である。

百済では、始祖王の扶余温祚（オンジョ）を高温祚とも言い、百済の王族の姓である扶余を高とも言った。

扶余で太陽を指した「解（ヘ）」という姓が、高朱蒙集団の南下後、高句麗では「高」、百済では「扶余」「高」と記録されていたことからもわかるように、当時の「解」「高（コ）」「句（ク）」「扶余（プヨ）」「夫婁（プル）」などは、太陽または火を現す語であり、百済の日本語読みである「クダラ」の「ク」も、それらと同じ意味の「パクタル（明るい山）」という百済語の音に由来したものであった。

このように「百済（ペクチェ）」の語源は、古代朝鮮語の「パクタル」であり、その意味は「明るい山」である。

百済人が「明るい山」を国名としたことについては、百済の建国説話を見れば十分にうなずけるであろう。

「漢（ハン）山に至って負児（プア）岳に登り人の住めそうなところがないかと四方を見渡した。沸流が海辺に住むのがよかろうというと、10 人の臣下が彼を諫めて『思うにこの川の南側の地は北に漢水を控え、東は高い山岳を背にし、南は沃土が望まれ、西は大海に閉ざされております。このような天険の要害をなすすぐれた地は他に得難いでしょうから、ここに都を定めることが上策だと思います』と進言したが、沸流は耳を貸さず従えてきた民の半ばを引き連れて彌鄒忽（ミチュホル）に行き、そこを居住の地とした。温祚は河南の慰礼（イレ）城を都とし、10 人の臣下を補佐に当たらせ、国名を十済（シプチェ）とした。…沸流は、彌鄒忽の地はじめじめし塩分が多くて安住し難いとして慰礼に帰った。そこでは都がすでに整備され、人民がのどかに暮らしていたので、羞恥と後悔の念にかられ、病を得て死んだ。彼の臣下と民はこぞって慰礼に帰属した。その後、最初慰礼にやってくるとき

百姓（民）がみな快く従ってきたとして国名を百済と改めた」

この説話の要は、高句麗から南下した沸流、温祚兄弟による建国の地の選択と結果である。兄弟がそれぞれ選んだ候補地のうちどちらがすぐれているかを見定めたうえで建国者の力量及び智謀の適否を決定したことは、特異な出生や卓絶した武技によって建国者のすぐれた資質を強調した同時代の高句麗や新羅、伽倻などの建国説話に比べて特記すべきである。

この建国説話で注目をひくのは、兄弟の分裂と統合の因をなした漢山と負児岳である。

「漢山」の「ハン」は古代朝鮮語の「ハナ」の音便であり、「ファンハダ（明るい）」の「ファン」と同じく「明るい」「光明」を意味する語である。したがって「漢山」は「明るい山」である。同じく「負児（プア）岳」も「プルサン（火の山）」「パルグンサン（明るい山）」という意味を持っている。言い換えれば「負児岳」は「明るい山」「明るい地」という意味の地名である。

それに、「漢山」は百済人の崇拝観念と結びついた重要な地であっ

た。これについては、百済が一定の発展を遂げて遷都した際、そこでも首都の名を「漢山」としたことからうかがえる。百済人が南下して、まず定着した地は、建国説話にもあるように漢山と負児岳のある慰礼であった。慰礼は漢江の北側にある土地で、漢山と負児岳が今日の北漢山（プクハン）（三角山（サムガク））と白岳であることは歴史的に証明されている。

『世宗実録』地理誌には、白岳について「都城の北側にある山であり、新羅時代には負児岳と呼ばれており、都城の鎮山（裏山）で、白岳」と言うと記されている。

百済が一定の発展を遂げた後、「漢山の下」に都を移したとされているが、そこは今日の京畿道（キョンギ）広州（クァンジュ）地方であり、当地の南漢山が「漢山」である。

同じ名の山が同一の地域にあったということは、名称制定者の移住及び天神崇拝観念と関連している。

「漢山」という名は、百済の政治集団の移住によって生まれたものである。百済人は、遷都の都度、具体的な地名をあげず、ただ「漢山の下」と記している。

このように彼らは、最初に定着し、建国の大業を論議、決定した地名を「ハンサン」つまり「パクタル（明るい山）」と称し、これを国号としたのである。このことは、温祚集団がその国号を通して、百済の始原が檀君にあり、彼らもまた太陽を崇拝した「パクタル種族」と血のつながりがあることを明確にするためであった。

以上のことから「百済」という国号は、古代朝鮮語での「パクタル（明るい山）」を意味し、この国号によって百済人も檀君の後裔であり、太陽を崇拝していたということと、百済は高句麗から分離し小国を建てたが、次第に強大な封建国家に発展したということを知ることができる。

古朝鮮の遺民が建てた国－新羅

従来、新羅はさまざまの異なる漢字で表記されたが、それらの文字の本来の音は「徐那伐（ソナボル）」であった。

実際、『三国史記』では朴赫居世（パクヒョクコセ）が建国の際、国号を「徐那伐」としたとし、同地理誌ではそれが「徐耶伐（ソヤボル）」と記され、『三国遺事』新羅始祖赫居世条では「徐羅伐（ソラボル）」あるいは「徐伐（ソボル）」と書かれていることから

も知られる。

ここで「ソナボル」の「ボル」は、「ポルパン（平野）」という意味の語である。つまり「ソナボル」は「セボル（新しい野、夜が明ける野、東の野）」という意味であり、現在、国都を意味する「ソウル（都）」という語も「ソボリ」「ソボル」に由来している。

また、新羅の国号は新羅人の始原と信仰、祈願ともかかわっている。

新羅人の祖先は、太陽の子孫を自称する古朝鮮の遺民であった。

『三国史記』と『三国遺事』は、新羅の前身である辰の住人辰韓斯盧（チンハンサロ）人の起源を、「朝鮮の遺民」「天」から下った人たちだとしている。

『三国史記』には、「朝鮮の遺民が山奥に分かれて暮らし、六村をなした」として、辰韓斯盧六部の人たちは古朝鮮の遺民であると指摘している。

古朝鮮文化の影響のもと、その侯国となっていた辰には多数の古朝鮮人が移住しており、古朝鮮の滅亡後も、その遺民が同族の国辰に少なからず移り住んだ。

慶尚北道（キョンサン）の永川（ヨンチョン）郡と慶州（キョンジュ）市一帯の遺跡から、細形青銅短剣など古朝

鮮の遺物が多数出土していることは、多くの古朝鮮人が新羅に移住して来ていたことを物語っている。

天（太陽）を崇拝していた古朝鮮の遺民が立てた国であったからこそ、彼らは「夜が明ける所」「新しい野」などを意味する語をもって国号としたのである。このことは、新羅人の太陽（天）およびそれと密接な関係にある鳥、卵への崇拝観念を通してもうかがうことができる。

新羅は火（太陽）を崇拝していた古朝鮮の遺民によって建てられた国であったため、新羅人は建国始祖の名も火と関連づけて朴赫居世としたのであった。『三国史記』新羅本記始祖条には、「高墟（コホ）村長蘇伐公が楊（ヤン）山の麓を眺めると、蘿（蔓の一種）の井戸のそばの茂みの中で一頭のウマが地に伏していなないていたので、駆けつけて見ると、ウマは忽然と姿を消し、そこには大きな卵があった。卵を割ると、中から男の子が出てきたのでこれを育てた。彼は 10 数歳になると驚くばかりに成熟した。その不可思議な生に畏敬の念を抱いていた六部の人たちは、彼を王に戴いた。辰韓人はフクベを『パク』と言うが、彼を生んだ大きな卵の形がフクベに似ていたので彼の姓を『パク（朴）』とした」として、新

羅の始祖王朴赫居世を卵（太陽）と関連づけている。朴赫居世は「弗矩内(プルグネ)王」とも言われたが、これは、光明をもって世を治めるという意味であり、「パク」を「プル」に言い替えたのは、彼らの始祖の名をプル（火、太陽）と同じものとして解釈していたからである。

太陽崇拝観念から新羅では、日が昇る地のことを「詞脳野(サネボル)」「徐羅伐」などと言った。『三国遺事』には、新羅の始祖王朴赫居世の出生の神秘さに打たれて、彼を東泉つまり詞脳野で入浴させたところ、身体が光輝を放ち、鳥獣が舞い、天地が揺れ、日月が明るく輝いたとしている。

伽　　倻

朝鮮半島の中南部にあった辰では、前 2 世紀頃、その一部の地域である弁韓(ピョンハン)の 1 小国狗倻(クヤ)に封建的要素が芽生え、それが次第に大きくなった。このような封建的要素に基づいて、1 世紀半ばに伽倻国が立った。

伽倻は現在の慶尚南北道一帯つまり洛東江(ラクトン)右岸地域のほとんどと左岸の一部にまたがって存在していた封建的諸小国の連合体であった。

『三国遺事』の「本朝史略」によると、伽倻には 6 つの国即ち金官(クムグァン)伽

倻、阿羅（アラ）伽倻、古寧（コニョン）伽倻、大（テ）伽倻、星山（ソンサン）伽倻、小（ソ）伽倻などがあった。これらは最後まで中央集権的支配体制をうち立てることができず、金官伽倻または大伽倻を盟主とする連合体国家をなしていた。この 6 国の連合体国家は一まとめにされて、伽倻と称されている。

6 伽倻をまとめて伽倻としているのは、その前身国が辰時代の狗倻であったことに起因している。

史料によると、伽倻建国を主導した金首露（キムスロ）王の系譜は不明である。このことは、金首露の勢力が土着の勢力ではなく、外部から移住してきた勢力だということを示唆している。それは伽倻建国を前後して墓制が変化した事実を通して推察することができる。

人々の風習の中で、墓制はもっとも保守的で世々うけ継がれるのが一般的である。それが急激に変化したとすれば、その地に墓制を異にする移住民が住みついたか、他からの影響が強く及んだと見るべきである。

辰時代の石槨積石塚、石棺墓、石層底墓、それに竪穴墓や甕棺墓を使っていた狗倻に、伽倻の成立を前後して木槨墓が突然現れたのであるが、この伽倻の木槨墓は金首露が建国した金海（キムヘ）の亀旨（クジ）峰一帯にだけ見ら

れ、しかもそれらは支配層の墓に限られていたのである。

伽倻の成立を前後して、金官伽倻に出現した木槨墓の主はまぎれもなく、古朝鮮・扶余系の勢力であった。

古朝鮮の政治情勢の変化と関連して、住民はおりおり同族の住む辰に移住し、木槨墓制も彼らによって持ち込まれたのである。このことは、この地域で古朝鮮特有の青銅壷が多数発見されていることからも立証される。こうしてみると、亀旨峰一帯の木槨墓は古朝鮮から移住したと見られる金首露勢力と無関係ではないのである。

伽倻国の始祖王金首露の勢力が、古朝鮮からの移住民であったことは「駕洛(カラク)国記」をはじめ多くの史料に、彼の出自が「天」としていることからも推し量られる。高句麗、扶余、新羅の建国説話で建国者の出自を「天」としているが、この「天」が古朝鮮人つまり、古朝鮮の移民またはそこからの移住民を指す語であることについては、すでに歴史学界で論証されている。

「天」の名で通称される「天」「太陽（日）」「卵」「鳥」などは、古朝鮮人の崇拝の対象であった。

いという意味の「パルグン」「パル」と呼んでいたことと関連した名称であり、それに、その地が高句麗時代から渤海と呼ばれた海に面していたことから付けられた名称でもあった。

「渤海」は、以前から海の名または、その沿岸地域の地方行政単位の名として使われていたのである。現存する文献によれば、中国では前3世紀以前から「渤海」を海の名として使っており、前漢時代にはその沿岸地域を地方行政単位の名としても使った。この渤海を、698年大祚栄が高句麗の故地に国を立てた際、それを国号としたのである。

ところで前 3 世紀以前古代の中国人が呼んでいた渤海は今日の渤海と同じ海であるが、彼らはこれを滄海とも言った。たとえば「隋書」には、「遼東の戦いで莱護児は楼船を率いて滄海に向かった」とあり、「唐書」には「滄州景城郡はもと渤海郡が治めた」と記されている。

また三国時代、魏の曹操は碣石山に登り、渤海を眺めて、「東方の碣石に至り、滄海を望めば、波騒ぎ、山は長く連なる」と吟じており、唐の『初学記』には「東海に別に渤海があるため、東海全体を渤海とも言う。また滄海とも言う」とある、

このように、古代の中国では渤海を滄海とも言っていたのであるが、この地方が「渤海」と呼ばれたのは、決して海の位置や形態によるものではなかったのである。

漢の武帝（前 140〜前 87 年）に仕えた東方朔の書とされる『十洲記』に、「滄海道は北海にある。水の色が緑であるところから仙人は滄海と呼んだ」という記述がある。これと中国古代の地理書『山海経』の「朝鮮は列陽の東、海の北方、岱山の南にある」「東海中の北海のはずれに国があり、名を朝鮮と言う」という記述を照らし合わせてみるとわかるように、滄海道とは朝鮮の地域名であり、仙人とは、孔子が聖賢君子の死ぬことのないと言った古朝鮮の人たちのことである。そして滄海という名も古朝鮮人が付けた名である。

滄海は三国時代以前に存在した朝鮮の地方名の一つであり、それが海の名となったのである。つまり、渤海と滄海はいずれも、古代朝鮮人によって名付けられた古代朝鮮語の漢字表記である。

では、国号としての「渤海」の古代朝鮮語の語音と語義は何であろうか。

渤海は朝鮮語の発音では「パルヘ」であり、ここで「パル」は前述したように「明るい」「光明」を意味する古代朝鮮語であり、「ヘ」は「海」ではなく「太陽」を意味する「カ」「コ」「ク」などの訛りである。

ところが、この「パルヘ」が後に中国で「渤海」と表記されるようになったため、誰もが「パルヘ」を海だと考えるようになったのである。

このように「渤海」という国号は「明るい太陽が照る国」という意味であり、そこには古朝鮮人の崇拝観念と族名の継承意志とともに、故地回復の決意がこもっているのである。

古朝鮮、高句麗の後裔である渤海人は「パルヘ（パルコ）」の伝統的な意味が「パル族の国」「明るい太陽が照る国」であることをよく知っていたので、天子の国という誇りを抱いて 698 年の建国にあたって「渤海」を正式の国号としたのである。

（3）最初の統一国家－高麗

高句麗の継承国－高麗

高麗は、10 世紀初めから 14 世紀末まで存続した朝鮮史上最初の統一国家である。

9 世紀末、北方の渤海と併存していた後期新羅は、苛酷な封建的搾取に抗する各地農民のたたかいによって衰退し、国情は大いに乱れた。そうしたなかで、西南地方では甄萱（キョンフォン）が後百済を立て、北部では泰封国（テボン）が出現して後期新羅は後三国に分裂した。

10 世紀初め、後三国間の抗争が災いして人民の生活はいよいよ悪化した。その頃、松岳（ソンアク）（開城（ケソン））地方で勢力を振るう泰封国の支配者弓裔（クンイェ）の部下であった王建（ワンゴン）は、918 年、政変を起こして弓裔を倒し、開城を首都とする高麗国を立てた。

「高麗」という国号は、朝鮮史上最も強大であった高句麗を継承したものである。

高句麗と高麗は同義語で、三国時代、高句麗はしばしば高麗とも呼ばれていた。

10 世紀初めに立った高麗が、高句麗の国名を採って高麗としたのは、高句麗の三国統一志向をうけ継いで国土の統一を果たし、高句麗に劣らぬ強大国を建てようとしたからである。

高句麗を継承し、国号を高麗としたことについては、高麗人自身大きな誇りを抱いていた。このことは 993 年の高麗－契丹戦争に際して、高麗の徐熙(ソヒ)将軍が談判に臨んでおこなった発言を通してもうなずけるであろう。契丹の蕭遜寧は「その方の国は新羅の地に生まれた国」であるため、高句麗の旧地を占めるいわれはない、という荒唐な論拠をもってその侵略を正当化しようとした。徐熙はこれに対して、「わが国はほかならぬ高句麗の継承国であり、それゆえに国名を高麗とし、国都を平壌に定めた。いわんや国境について云々するならば、契丹が占めている東京(トンギョン)（今日の遼陽）はわが国土の中に含まれなければならない」と論駁した。

周辺の国々も、高麗が高句麗の継承国であることを認識していた。

後唐（923～936 年）は、933 年 3 月、高麗へ送った手紙に、王建について「朱蒙の建国伝統をうけ継ぎ、貴国の君主となった」としており、高麗が高句麗の継承国であることを確認している。

「高麗」という国号が高句麗の名をとって付けられたことには、高麗を倒して立った李朝も史実として認めていた。たとえば、李朝の建国者李成桂は、編纂を終えた『高麗史』に目を通した後、鄭道伝（チョンドジョン）に下した指示で、「王氏王朝は高句麗の国名を継承して高麗と号し、三韓を一つの国に統一した」として、両国号の継承関係を認めている。

高麗が高句麗の統一志向をうけ継いで、国号をそのまま取り入れたことは、とりわけ、高麗の成立当時、人民の統一志向が急激に高まっていたこととかかわっていた。

高麗の成立（918 年）当時、国内の情勢は錯綜を極めていた。

大同江（テドン）以南地方は極度に混乱し、高麗、後百済、新羅の 3 国が鼎立していたが、ほかにも数個の村に立てこもって「城主」「将軍」などを自称している勢力も少なくなかった。これら群小勢力は、自領域の人民をほしいままに抑圧、搾取する一方、勢力圏拡大の戦いへと駆り立てた。

国土の分裂と果てしない戦争は、人民に計り知れない災難をもたらした。

北方の国渤海の状況も穏やかでなかった。各地に封建諸勢力が割拠し、国内は混乱を極めていた。渤海の支配下にあった靺鞨族（女真）は、この隙に乗じて独立への動きを見せ、他方、契丹は渤海侵略の機をうかがっていた。こうした情勢は、国土の一日も早い統一を求めた。人民は苛酷な抑圧と搾取に抗してたたかうなかでも、国土の統一を願ってやまなかったのである。

元来朝鮮人は、同一の文化と言語、血筋を持ち、同じ国土で暮らしてきた単一民族として、国土統一の志向が強かったが、それがこの時期に至って急激に高まったのである。高麗の統一への動きが強まったのは、こうした時代の趨勢と切り離しては考えられない。

統一をめざす高麗はまず、後百済と新羅の併合に力を傾注した。

935 年 6 月、後百済王甄萱が高麗に降り、ついで 11 月新羅の敬順王（キョンスン）（金溥（キムブ））も貴族・官僚とともに開京（ケギョン）（開城）にやってきて帰順の意を表した。

後百済と新羅を併合した高麗は、大同江以北の広大な高句麗の故地

回復をめざす戦いを強力に進めた。

西北地方への高麗の進出は、高句麗の国都平壌の再建事業から始まった。

高麗は平壌を極めて重視し、国都開京の建設に先立って、平壌の復旧に努め、ここを副首都とした。彼らが、国都を鉄原（チョルウォン）から開京に移すことにしたのは、919 年（太祖 2 年）であったが、平壌の復旧に着手したのはその 1 年前の 9 月であった。つまり高麗建国後の最初の大事業は平壌建設だったのである。

南方の情勢が錯綜していたにもかかわらず、太祖王建は毎年西京（平壌）を訪れたばかりでなく、後代の王も 1 年に 100 日間は西京に在留して政治を行うよう強調した。高麗の支配層はそれほど平壌を重視していたのである。

高麗が平壌を重視し、その建設に力を注いだのは、平壌が西北方面の軍事的・政治的要衝であったことにもよるが、東方の強大国高句麗の国都であったというその地位ともかかわっている。高麗は平壌に依拠して、北方の防備を固め、やがては当地に遷都して、高句麗の全故地を回

復し、強大国を築き上げる構想を抱いていたのである。

渤海の滅亡後、高麗の北方進出と統合活動は、高麗領内に移ってくる渤海遺民を積極的に受け入れることと結び付けて行われた。

渤海人は、国の滅亡後、故地回復の戦いを止むことなく続け、戦いに破れ、苦境に陥ると、同族の国高麗の地へ避難してきた。こうして無数の渤海遺民が高麗に移住したのである。

934 年、渤海の太子大光顕（テグァンヒョン）の帰属、935 年、後期新羅の金溥の投降、936 年、後百済の併合へと続いて高麗の国土統一は一段落ついた。

このように、高麗は約 20 年間の戦いを経て、後百済、新羅の全土と住民、高句麗・渤海の少なからぬ故地と住民を支配下に置くことに成功した。

高麗はさらに、三国時代に本土に服属していた于山（ウサン）国（鬱陵（ウルルン）島、独（トク）島）と耽羅（タムラ）国（済州（チェジュ）島）に対する政治・経済・軍事的統制を強化することによって、統一なった全領土の中央集権力を一段と強化した。

高麗は、檀君を民族の始祖に崇め、民族的団結と統一を図った高句麗の伝統的な祭祀儀礼も継承した。

高麗は、古朝鮮の国都であった西京（平壌）に檀君祠堂を立て、檀君の生地であり埋葬の地でもある平壌を「わが国地脈の根本であり、大業万代の地」として、毎年檀君祭祀を盛大に執り行った。

このように高麗は、同族諸国の統合をめざした高句麗の志向を継いで、分裂していた新羅、後百済、渤海を統合することにより、朝鮮史上最初の統一国家を樹立し、「高麗」をその国号として世に誇ることになったのである。

「コリア」の由来

朝鮮史上最初の統一国家高麗は、経済・文化の発展にともない、東方諸国はもとより、ヨーロッパにまで広く知れ渡った。

今日、朝鮮を「コリア」と言う欧米語は、高麗に由来している。「コリア」は「高麗」の音訳である。朝鮮はフランス語で「コレ」（Coree）、英語で「コリア」（Korea）、ロシヤ語で「カレヤ」（Карея）と呼ばれている。発音と表記に多少の違いはあるが、いずれも高麗の音訳である。

高麗の名がヨーロッパに伝わる以前にも、高句麗と渤海は高麗と言う名で東アジアから西アジアまで伝わっていた。こうした史実を踏まえて、統一国家高麗の名も対外的に広く知れ渡り、高麗は朝鮮を指す名称として定着したのである。

高句麗は国名を高麗とも言った。

高句麗の滅亡後、698 年に立った渤海を指して、東方諸国の人たちは多くの場合高麗と呼んだ。

中世の日本の史書に見える渤海人直筆の国書原文の内容や 8 世紀日本の官庁公文書、寺院の古文書などでは渤海を高麗と記している。また、8 世紀半ば、チベットのホル国では、「クリ（高麗）」と表記している。

高麗の国名がヨーロッパの記録に見られるようになったのは、13 世紀半ば以降である。

1250 年頃、ローマ教皇インノケンチウス 4 世と、フランスのルイ 9 世の命で蒙古に入ったフランス宣教師ルブルックは、1253 年に帰国して、中国の東方に「カウレ（高麗）」という国があると国王に報告した。この報告書は、高麗の名が見えるヨーロッパの記録としては、現存する

記録のうち最古のものである。

その後、高麗の名がヨーロッパに紹介されたのは、13 世紀末、ヴェネツィア商人出のイタリア人マルコ・ポーロの『東方見聞録』によってであった。ここで彼は、高麗を「カウリ」と記してヨーロッパに紹介している。

高麗の名は、16 世紀に至り、ポルトガル人やイタリア人によって頻繁にヨーロッパに紹介された。

1513 年 6 月、ポルトガル国王エンマヌエルがローマ教皇レオ 10 世に宛てた手紙や、1557 年リスボン出版の『アルフォンソ・ダルボゲル伝記』の中に、「ポルトガル人がマライ半島のマラッカ港を占領していた時、毎年『ゴレス（Gores）』の貿易船 2〜3 隻が寄港していた」とある。ゴレスは高麗である。

1571 年、ポルトガル人ドウラド作の『世界地図』にも、中国北部の湾に『コンライ（Conrai）』海岸が図示されている。

1571 年、ポルトガルの神父ガスパル・ビレダがインドから本国に送った 2 通の手紙には、日本から海で 3 日間かかるところに「コライ

（Coray）」という国があると書かれていた。

そのしばらく後のヨーロッパ人の記録には、朝鮮をコレアと記している。

また、ポルトガル人パトレ・アントニオ・プレネスチノは、1578年、「数年前、日本に向かっていたポルトガル船が『コレア（Corea）』の沿海で暴風に遭い漂着した」と書いている。

イタリアのフィレンツェ生まれの神父、フランチェスコ・カルレッティは13年間、大西洋と太平洋を渡り世界を一周して帰国した後、『世界周遊記』を著した。彼はこの書に、コレアは9国（8道の誤記）に分かたれており、王国の名は朝鮮と呼ぶ、と書いている。

17 世紀にも、ヨーロッパの地図作成者や地理学者たちは、朝鮮をおしなべてコレアと表記している。

1615 年、フランスの地理学者ゴディンホはそのアジア地図に、朝鮮をコリア（Coria）、イギリスのディドリは東北アジア地図にコライ（Corai）、1679年、ダメルニエはコレ（Coreer）、1750年、ロベルト・ブゴンディはコレ（Coree）と各々表記している。1777 年、イタリアの

アントニオ・ザタ教授が製作したアジア地図にも朝鮮をコリヨ、1771～1778 年、イギリスで出版された大百科辞典にも、コリアと表記されている。

今日まで伝えられた 13 世紀以降ヨーロッパ人が残した諸資料には、上に見たように、朝鮮をカウレ、カウリ、コレス、コンライ、コライ、コレアなどまちまちに表記されているが、この違いは筆者が朝鮮についての話をどの国の人に聞いたかという発音上の違いによるもので、その由来はいずれも高麗にある。

次に、現在の高麗の英語式表記（Korea）にかかわる日本帝国主義者の侵略的謀略について付言しておきたい。

高麗の名が西アジアやヨーロッパに知られて以来、その表記は英語、フランス語、ポルトガル語、イタリア語などにかかわりなく、すべて「Corea」と表記された。1882 年の「朝米条約」、1883 年の「朝英修好条約」の英文版にも、朝鮮は Corea と表記されている。

しかし、朝鮮侵略を企てていた日本は、20 世紀初め、世界的に行われる政治・文化・スポーツ行事などで各国国号の頭文字を英語のアルフ

ァベット順に並べるようになると、Corea の C が Japan の J よりずっと前にあるとして、1902 年 1 月の「日英同盟」締結時に Corea の C を J の次にある K にすり替えて Korea と表記し、朝鮮の順序が日本の後ろにおかれるようにした。この卑劣な策謀によって世界における日本の地位がどれほど高まったかは知れないが、この一事をもってしても、日本の侵略的性格と悪辣さがいかに執拗かつ低劣なものであるかがよくわかるであろう。

(4)　李朝の成立と国号「朝鮮」

500 年近く続いた高麗王朝は、1392 年、李成桂の反乱によって滅亡した。

新王朝の政権基盤がいくらか固まった同年 11 月、李成桂は国号問題を討議に掛け、翌年 2 月、「朝鮮」とすることを内外に宣布した。

李成桂が国号を「朝鮮」としたのは、「忠君思想」を踏みにじって強行した政権簒奪を合理化し、自らの正統性を主張することで、反対勢力を沈黙させることに主目的があった。

彼は自分の 4 代にわたる先祖を古朝鮮王朝と結びつけ、その履歴と業績をもっともらしく捏造し、宣伝することによって、彼の家系が高麗時代よりはるか以前に淵源を持ち新羅時代にも司空を務めたほどの「歴史的名門」であるから、自分が王座に就くのは当然だと広く認識させようとしたのである。

李成桂の先祖の系譜を偽造することがきわめて重要な問題として浮上したのは、家系と門閥を重視していた当時の封建社会で、李成桂のように系譜と家門が不透明な官吏が王朝を覆えして王座を占めるという事態には誰もが首をかしげた。実際、彼が王になったことに不満を表わす勢力は少なくなかった。

李成桂は、自分の先祖は元来朝鮮の後裔で、新羅時代に司空の官職にまで就いていたと法螺を吹いた。つまり、李成桂にとって自政権の「歴史的正統性」を内外に認識させるため、その家門が高麗時代よりはるか以前の古朝鮮に淵源を持つ名門であることを「誇示」する必要から、国号を「朝鮮」としたのである。

李成桂が国号を「朝鮮」としたのは、檀君と古朝鮮に対する人民の

伽倻人の太陽崇拝の信仰は、彼らの日本列島への進出を記述した『古事記』や『日本書紀』の説話を通しても知ることができる。

『古事記』には、本国伽倻から日本の九州に進出した住民は九州が伽倻に向かっており、朝日がよく差し、夕日もよく差す所だと言った。彼らはたとえ本国の伽倻を離れて来たとはいえ、伽倻に近く、「日もよく当たる土地」に落ち着けたことに喜びを感じつつも、他方では太陽の国、伽倻国をしのんでいたことを叙述している。

以上見てきたように、伽倻の金首露の勢力は古朝鮮からの移民集団で「天」「太陽（卵）」を崇拝していたことから、その系譜と信仰を表現すべく、種々の意味を持つ古代朝鮮語「カヤ」の「天」「太陽」「卵」という意味に注目し、それを国号としたのである。

(2)　「海東の盛国」－渤海

渤海（パルヘ）は、朝鮮史上もっとも強大であった高句麗を継承し、その故地に、高句麗の遺民により 698 年に建てられた強力な封建国家である。

「渤海」とは、朝鮮民族が久しい昔からその族名ないし国名を明る

崇拝心がかつてなく高まっていたこととかかわっている。

同一民族である朝鮮民族の内部で王朝が交替しても檀君によって礎が築かれた民族の伝統と因習、国に特有な統治方式が一朝一夕にして変わるはずはないのであり、したがって李朝政府は成立を宣した 1392 年 8 月、「朝鮮の檀君は東方最初の国家を建てた王であるから、毎季節祭祀を行うこと」と指示し、民族の元祖檀君に対する観点には新王朝も変わりがないことを表明したのであった。

当時、人民の檀君崇拝が一段と高まっていたのは、檀君がつねに自分たちを見守って、幸せと苦しみを共にし、とりわけ、疾病や諸災厄から自分たちを救ってくれるものとますます強く信じるようになっていたからである。

彼らは、洪水や干魃などの天災に遭うと、毎年の定期の祭祀とはかかわりなく、九月(クウォル)山の檀君祠堂・三聖(サムソン)祠で祭祀を行いさえしていた。

このように人民の檀君崇拝を利用したことは、李成桂の政権簒奪を合理化し、新王朝の「正統性」を強調するうえに大きな効果を上げた。

李氏王朝自身、檀君が朝鮮民族の始祖であり、国号「朝鮮」は檀君

によって制定されたということにいささかの疑問も抱いていなかった。だからこそ李成桂は、人民をなだめ自政権の「正統性」を認めさせるためにも、檀君朝鮮を継承して国号を「朝鮮」とし、ひいては、檀君祭祀を法制化さえしたのである。

国号「朝鮮」についての解釈は、外国人の間でも知られるようになった。1885 年、アメリカ人天文学者パーシバル・ローウェルは「朝鮮」を「The Land of the morning calm（静穏な朝の国）」と言った。

このように高麗王朝を滅ぼして立った新王朝の国号「朝鮮」には、檀君朝鮮の血縁的後裔という継承関係と、李氏王朝の「歴史的正統性」の「合理化」をはかった支配階級の意思が反映されていたのであった。

3　朝鮮民主主義人民共和国

1948 年 9 月 9 日、朝鮮民主主義人民共和国の創建が世界に宣言された。

金日成（キムイルソン）主席によって創建された朝鮮民主主義人民共和国は、北と南に居住する朝鮮人民の総意によって立てられ、その利益を代表する朝鮮

半島唯一の合法的国家である。

共和国の創建によって、朝鮮人民は史上初めて国家社会の真正な主人、自己の運命を自主的に開いていく尊厳ある人民となり、朝鮮は威厳ある自主・独立国として、チュチェの旗のもと世界の国々と同等の権利を持って国際場裏に臨めるようになった。

金日成主席の提唱によって制定された国号「朝鮮民主主義人民共和国」には、共和国の自主的かつ民主的にして人民的な性格が明確に反映されている。

「朝鮮」は、そこに 5000 年の長い歴史と伝統がこもる、わが国に最もふさわしい、意味の深い名称である。

また、ここに表示された「民主主義」は、反帝反封建民主主義革命の段階にあった国の現実が適切に反映された、新しい形態の民主主義であるということを意味している。

一般的に、国号には国家政権の階級的本質と国家形態が反映されるものであるから、国号の制定では、その国のまたは革命の根本的な目的と当面の任務が反映され、ひいては国の実情も考慮されるものである。

金日成主席は、朝鮮革命の性格を反帝反封建民主主義革命であると定義し、解放祖国の地に立てるべき政権は当然人民のための制度、広範な人民大衆の利益を守る民主政権でなければならないとした。

こうして、朝鮮民主主義人民共和国の「民主主義」には当時世界的に流行しはじめた「民主主義」とは根本的に異なる、独自の方式の「進歩的民主主義」という深い意味がこもることになった。

金日成主席の独自の方式の進歩的民主主義は、少数の特権階級が全国家権力を掌握し、人民大衆を搾取し抑圧する体制を擬装するための「ブルジョア民主主義」とは本質的に異なる、人民のための真正な民主主義である。

それはまた、一部社会主義諸国で行われている民主主義とも異なり、人民大衆が国の主人となり、一部の反動分子を除く全人民の自由と幸福を確実に保証する真正な民主主義である。

国号中の「人民」にも深い意味がこもっている。

人民とは、社会の富を創造し、社会の発展を推し進める上で進歩的役割を果たす階級・階層のことである。社会主義社会では、清算された搾

取階級の残党を除く全勤労者大衆が社会主義建設に積極的に参加しており、彼らすべてが人民を構成する。今日、最も先進的な社会主義制度を持つ朝鮮では、労働者、農民、知識人が人民の構成員である。主席は人民を歴史の主体、国の主人とみなし、そうした意味で国号に「人民」という語を入れたのである。

国の主人、社会の強力な主体である朝鮮人民は、金正日(キムジョンイル)国防委員長の仁徳政治のもとで、社会的地位と役割を不断に高め、最高の人民的国家施策と恩恵に浴して幸福な生活を営んでいる。

国号も朝鮮民主主義人民共和国、主権も人民主権、施策も人民的施策、制度も人民的制度、つまり国家社会の全分野で人民が主人となっている社会であるところから、主席は、この人民的な祖国を守る軍隊を「人民軍」と命名し、建国直後、朝鮮人民が初めて作った石鹸に「人民」という名を付けもした。

今日、朝鮮では、学校や病院、文化宮殿、大学習堂などにも、その主人が人民であるとして、すべてに「人民」という名称が付けられている。

国号における「民主主義人民共和国」という語にはまた、独自の国家

建設形態が反映されている。

「民主主義人民共和国」という語には国家の最高権力が労働者、農民をはじめ広範な各階層人民大衆の意思を代表する代議制機関に集中し、全国家権力が徹頭徹尾民主的に実現される国家形態を反映している。この語にはまた、広範な各階層人民大衆を国家の真の主人に押し立てることによって、国家を彼らに服務する人民的な民主国家にならせようという深い意味がこもっている。

以上見てきたように、国号「朝鮮民主主義人民共和国」は、朝鮮人民に無上の民族的誇りを抱かせ、チュチェ朝鮮の尊厳と栄誉を世界にとどろかせる、意味の深い国号である。

＊　　　＊　　　＊

上述の通り、国号「朝鮮」は、5000 年前パクタル族によって平壌地方に生まれ、それ以来、古朝鮮の伝統と民族的単一性は朝鮮民族が立てた歴代諸国にうけ継がれ、言語的固有性と優秀性を維持し、合法則的に発展してきたのである。

著者：社会科学院博士　　孔明成

編集：崔明順